高校阿倍野新聞

発行所
大阪市阿倍野区阪南町中一丁目30番34号
大阪府立阿倍野高校
新聞部
編集責任者　青山安江
西田敬子

部説

信頼感を！

お互いに

現在よく「親子の断絶」ということばが使われているが、今わが阿倍校内でもやはり同じような「断絶」や「冷たさ」といわれるものがあるように思う。中には「いや、そんなことはない」という人もあるだろうしかし、現実の我が校を見た場合、前者の考えを肯定せざるをえない状態なのではないだろうか。

なぜ、そんな「先生と生徒の間」ができたのだろう。我々から見れば〝先生とは年令に差があるので考え方がちがう〟〝阿倍高の先生は形式主義の先生が多く、また相談しても、心から考えてくれないような気がする〟という理由などから、生徒が先生に近よらないようになるのであろう。しかし、先生は〝生徒が何かをもちかけてくるのを待っている〟〝自分たちから進んで、生徒たちにぶつかっているつもりだ〟とおっしゃられているそうだが、我々から見ればやはり先生の大半が前に書いたように近づきがたく思えてくるのだと思う。

ここで我々生徒が考えなければならない点があるだろうそれは次のようなことである。〝なぜ先生に対する質問、疑問を直接先生に聞きに行かず、友達どうしで考えあって、わからぬままにうやむやに済ませてしまっているのか〟という疑問である。〝なぜか？〟といえば、やはり第一に〝信頼感〟ということがあがる今回のビラ配りの問題によって〝信頼感〟というものについて深く掘り下げられた。「なぜ、筆跡をしたのか。先生は生徒を信頼していないのか」ということも一部の生徒の間でささやかれていたし、またいろいろな申し込み用紙などに父兄の印をおすことなどもあげられる。先生の方が、我々生徒側を信頼していないように思えるので生徒側としても、先生を信頼できなくなるのだだから、一つ一つ疑ってみる。疑うということは、そのことを理解するための一つの手段であろうが、まちがった方で度を過ごすと何事にも物を曲げて見る人間ができてしまうのである。もしかすると、本当に曲がった人間を作るような重大な〝信頼感〟が先生と生徒の間でないということは、非常に危険である

生徒が先生を信頼しないまた先生も生徒を信頼しない。そして日に日に深くなっていく先生と生徒間の溝我々はこれをどのようにのりきっていくべきなのだろうか。

昭和45年度自治会役員選挙

重富内閣に期待を！

一年生の立候補者目立つ

昭和四十五年度前期の自治会選挙演説が、六月三十日、放送を通じて行なわれた。会長四名（うち一人棄権）副会長一人、書記一人会計二人、二学男子一人、女一人、一学男二人、女一人がそれぞれ立候補したが、結局会長―重富勝巳（三ノ三）副会長―金本聖真（一ノ一）書記―中村通子（二ノ四）会計―沖正幸（二ノ三）二学代男―浅尾裕（二ノ八）女―松尾芳子（二ノ四）一学代男―中根隆良（一ノ八）女―斉藤奈津子（一ノ三）（敬称略）が決まった。尚、三学年代表は立候補者がなかったため議員の中から佐谷光一（三ノ六）松本陽子（三ノ三）（敬称略）が推選され、信任された。

延び延びになっていた前期自治会執行部役員の選挙が六月三十日（火）の放課後行なわれた。この日は、あいにくの雨天のため、各クラスのホームルームで放送を通じて演説が行なわれた。しかし、三年生の立候補者が一人しか居らず、又三年生学年代表が男女ともに立候補者がなかった。再々受付で多くなった候補者だが、みんな積極的に立候補する人が多く、活発な選挙だったといえよう。

今回の演説時間は、立候補者、応援弁士ともで三分三十秒ときっちり決められており、演説する方にとっては、少しもの足りない感じがしただろう。演説の途中で切られた候補者も居たが、外で立合演説会をするよりも、聞き取りやすかったようだ。しかし、表現豊かな候補者には、少し残念だったろう。

今回は、無効投票をなくすために、全部○か×を絶対付けるよう厳しく注意された。そのためか、無効投票は非常に少なかったが、やはりいくら注意してもきけないらしい人も少しいたため、白紙の用紙も少しあった。しかし、やはり例回とちがって正票が多く、又問題もなく、ストレートに開票が出来たため、わずか二時間余りで結果が出た。

尚、三年生の学年代表は議会の中から決まった。

重富会長の挨拶

一九七〇年、この年は皆様も御存知の様に、日本は安保を境に社会的にも政治的にも新しい時代をむかえた。我が阿倍高にも少なからず時代の波が押し寄せて来た様に思う。我々執行部はこの新時代に自治会の諸種の行事を担当させてもらうこととなり、非常な栄誉と共に重責を感じている。「生徒と教師の対立」を二面的にとらえずにもっと良く話合いを持つ事を目標に地味だと思うが、着実にやってゆきたい。

役員	氏名	学年組	信任	不信任・無効
会長	重富　勝己	3年3組	628	50
〃	古田　浩一	2年1組	239	
〃	宮川　洋一	2年6組	177	
副会長	金本　聖真	1年1組	682	412
書記	中村　通子	2年4組	905	189
会計	沖　正幸	2年3組	570	87
〃	平木　忠	2年4組	437	
Ⅲ学男	佐谷　光一	3年6組	255	106
女	松本　陽子	3年3組	311	50
Ⅱ学男	浅尾　裕	2年8組	340	33
女	松尾　芳子	2年4組	323	50
Ⅰ学男	出口　篤	1年3組	100	32
〃	中根　隆良	1年8組	235	
Ⅰ学女	斎藤奉津子	1年3組	274	93

母子の犬

母子の太が
青空の下で
自由を求めて歩いて
いた。
一匹の大犬が
母子の犬に言った

この山の向こうには
自由が待っていると
母子の犬は歩いていった
行ってはいけない
所と知りながら
ただひたすらに自由を
求めて
母子は歩いていった

奪われた民族を取り戻そう

三年四組　呉　秀　玉

さいきん、東京都内とその周辺で国士館高校生等による朝鮮高校生に対する集団的暴行事件が激発している。大阪でもごく最近、大阪朝鮮学校の高校生に対しても、同じような事件が起こっているが現在、詳しいことは調査中である四月八日から五月二十五日までで実に二十九件も発生している。過去に起きた集団暴行事件を含めると、今日、報告されているだけでも百件以上を数えている。

「朝鮮高校生に対する集団暴行事件の真相」（在日朝鮮人の人権を守る会）によると、各事件に共通する特徴として(一)犯行はきわめて組織的、集団的である。(二)加害者は右翼的な思想を持ちそれによって集団を形成している。(三)加害者と被害者とには、全く個人的な関係はない。(四)犯行はきわめて残虐であるなどの点が指摘されている。

このような暴行事件と時を同じくして、六月五日、警察当局が国鉄総武線沿線にある日本の高等学校に対して、「六月六日に朝鮮高校生達が総武線の各駅で日本の学生を襲撃するとの情報がある。したがって各学校では注意してほしい」との悪質なデマ行為を働いたということが、東京都高等学校教職員組合のその後の確認によって両国高校、墨田高校など多数の高校でデマ流布があったということが判明した。

このようなデマは、全くかつての警察権力が関東大震災の時に流した朝鮮人に対しての不当なデマと手口が似ている。そんなデマの結果当時一万人余りの朝鮮人が無惨にも虐殺された。このことは今の日本の歴史教育において、教科書から削られていることに注目すべき問題がある。大震災当時、一般国民の間には、政府に対して批判的な見方が支配しており全国各地では社会運動、労働運動が盛り上がっていて政府の反動性が追求されていた。そんなさなかに関東大震災が起こったのである。全く施すすべもなかった無能な政府は何をしたか。国民の反政府的な世論の盛り上がりを恐れ、こうした国民感情を別な方向へ向けさせ当時の反動的体制をなんとか固執しようと狂奔したのであった。「朝鮮人が各地で放火している」「朝鮮人が井戸に毒を投げこんだ」など、その他ありとあらゆるデマを流し、大量殺りくを強行し、そのどさくさに日本の民主勢力まで弾圧、虐殺し、国民をだまし、ファシズムへの道を開いたのであった。

これら一連のデマは、日本の国民に民族排他思想をあおり、在日朝鮮人と日本の国民との友好、連帯の運動を妨害する全く明らかな日本の民主主義を渇望する人達への挑戦である。

阿倍校の朝鮮人生徒の諸君、このような一連の朝高生に対する暴行事件、不当なデマを同じ同胞として朝鮮人として黙って見過ごすことができるだろうか。これらは朝鮮人に対する侮辱であり差別であり差別を合理化するものである民族虚無主義に陥り、盲目的な実利主義だけに走り、全くの祖国に対する正しい認識もない状態は、これからの将来において何を意味するだろうか。どのような事態をつくり出すのだろうか。それは過去において、日本の帝国主義者一味が朝鮮の富を略奪し、朝鮮人を抑圧、搾取したそんな歴史を繰り返えし、又、在日朝鮮人に対する差別を助長し、「出入国管理法案」など一連の日本政府によるファッショ立法を黙認し、闘争精神を失なわせることになるのではないでしょうか。

悲しいかな、僕達の祖国は、現在、インドシナ半島を侵略し、日本の沖縄を奪っているアメリカの帝国主義を妄想している奴等によって分断され、その為に四千万の同胞は、この上ない苦痛をなめています。

今、現在、僕達は日本の教育を受けているという逆境にあるが、父母がなめた屈辱の歴史を思い、真の幸福を求めるなら、今こそ、一切の植民地奴隷思想からくるあやまった劣等感を断固排斥し、真の民族主体性を取り戻そうではないか。阿倍高の同胞よ、取り戻そう、民族を!!　取り戻せたその日からは、喜びと自負心と確信と大きな、無限大きな愛を感じるであろう。そこには、無限の可能と生産があろう。

阿倍校の同胞よ、学ぼう、見よう、我等の祖国を。語ろう、叫ぼう、朝鮮民族の魂を、闘いを!!

学校との対立は我々まで…

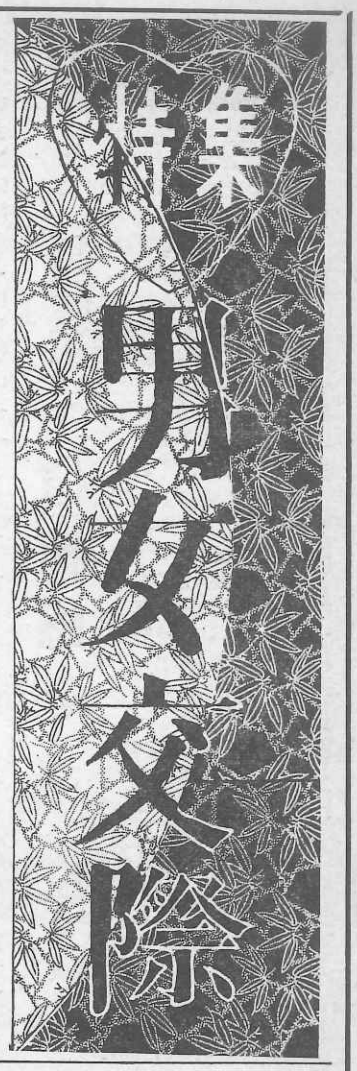
旧執行部声明

〝生徒のための自治会〟〝生徒の真の声を聞く場を！〟我々はそのスローガンを根底に先ず、定例集会の問題にとりくんだ。〝中途半端に終わらない〟それも我々の根本であった。HRの活発化と共に特別集会の関係、しかしそこにおいて全校生の要求にもかかわらず職員会議により否決されたことは我々執行部として、はなはだ残念であった。そしてその定例集会は集会部の妥協のもとで実現されようとしているが、今後その集会をいかに進歩的なものにするには生徒の不断の努力にまってなされるものと確信する。

真理の追求……我々執行部として二君が戻らないまま任期終了となるのは、本当に残念である。教師と生徒との対立……これを放置しておくことは真の自治会建設に何ら役に立たないと思う。しかしそれ以上にその根拠を自らの判断のもとで解決されないかぎり、ただ理想を追うだけで、我々真理を追求する者として全くの逃避に過ぎないと思う。事実の追求がなされないまま、次の段階に飛躍するということは、単なる誤解を生じるだけでなく、一般生徒からも不信に思われるのも当然だろう。HRにおける先生方の一方的な発言……我々執行部として誤解されている点。これも明確にしたかったそして一般生徒の自治会への無関心さを少しでも取りのぞきたかったこと。これは新執行部に依頼することになろう。我々は決して先生方の言われるように、一方向に走ったりはしていない、常に客観的立場からそして真理を追求するという高校生として、不充分ではあったが活動してきた。理想の学園とするためには、生徒個人が自主性をもって、又自分の問題として諸問題を取り上げねばならないそして最後に新執行部へ、学校との対立は我々の代までとして欲しい。そのためにも強く学校側へ協力を要請いたします。

針の穴

暑さもいよいよ本格的になってきましたナ。針子も毎日毎日、玉のような汗を流して、頑張っています。さて、明日からはうれしいうれしい夏休みですネ。どんなふうに過ごそうかなと胸をわくわくさせているのでは?。三年生の人は、もうそろそろ一、二年生の時の本を捜し始める頃ですネ。エ?もう売ったって?これはどうも失礼／▼夏といえば雨もよく降りましたナ。そのため、クラスマッチが延期延期になって、どうなることかと針子、内心心配で心配で夜も眠れなかったんですヨ。ホント／でも無事にクラスマッチも終了しました。バレーボールでは二年一組、サッカーは二年五組、ソフトボールでは三年一組が優勝しました。どれも手に汗をかくような試合でした。一回目のサッカーは、雨の中の対決（?）これぞまさしく雨ニモマケズの精神でしたナ。▼クラスマッチがあったせいか、何件かの盗難がありました。いつもこの時期には盗難が増えるようですから、みんな気を付けて下さいヨ。▼自治会選挙が行なわれました。申し込みが少ないので再々受付をしたところ、一ぺんに多くなって、久しぶりに対立候補が出て、活発な選挙となりました多くの立候補者から選ばれた立派な役員に期待しましょう。▼それはそうと六月十一日から、いろいろなビラが配られました。雨の中をずぶぬれになって昭和町の駅前でビラを配っていたお兄さん。カゼをひかなかったでしょうか。傘ぐらいさしてもいいのに……。いろいろな団体名で書かれてありましたが、そんなに多くの団体が阿倍高にあったのでしょうか。全然知りませんでしたヨ。何処からかわいて出たんですかナ。キット▼この六月十三日にビラを配ったために三年生の二人が謹慎になりました。又、その後で配られたビラで、ある三年生の人の筆跡と一致したとかで、この人も白状するまで謹慎とか。▼七月三日に予定されていた生徒集会が流れ、ホームルーム討論になりました。ところが、二年生の某組では、討論のし過ぎで、みんな授業中に目がトウロンとして勉強できないとか。しっかり長生きシロヨノハー。



有意義な交際を！

〝男女交際〟それは、学園生活をより楽しくし、人生経験を豊かにするために、欠かせないものだろう。新聞部としては、他校から男女交際の活発だといわれる我が校の男女交際についての実態を、アンケートで確かめてみた。この結果をみてもわかるように、みんな〝健全な明るい交際〟を望んでいるようだった。

まず「男女交際についてどう思いますか？」に対して、多いものをあげてみると、

▽一年男子
・大賛成、もっとやるべきだ
・最高のこと

▽一年女子
・清潔な美しいものなら賛成
・とてもいいことだと思う

▽二年男子
・人生を楽しくするため、心のはげみになるのでいいと思う
・多数でやれば良い

▽三年女子
・高校時代において一度経験してみるべきだ
・お互いの成長に役立てることのできるような交際なら良い

▽三年男子
・真の心の友となるのが理想
・正しい交際なら二人にとって有意義なものになる

▽三年女子
・見た目に健全であればいい
・プラスとなるような正しい交際なら良い

以上のように多くの人は、男女交際を肯定している。そして、自分なりに、男女交際とは、こうあるべきだと意見を持っている人も多い。

次に、「男女交際から連想できるものは？」に対しての解答を、順番に上げてみると、次のようになった。

▽一年男子
①友情②恋愛③デート④その他

▽一年女子
①友情②恋愛③デート④その他

▽二年男子
①友情②恋愛③デート④その他

▽二年女子
①友情②デート③恋愛④その他

▽三年男子
①恋愛②その他③友情④デート

▽三年女子
①友情②恋愛③デート④その他

その他の中には、「あこがれ」「秘密」「相談相手」「涙」などがあった。

三番目に「もし、男女交際をしたとすれば親に相談できますか？」対しては

▽一年男子
できる―69％　できない―31％
できない理由としては、
・はずかしい
・秘密にしておきたい
・相談してもわかってくれない
・する必要がない……など。

▽一年女子
できる―84％　できない―16％
できない理由
・はずかしい
・干渉しすぎるので
・相談しても理解してくれない
・考え方にずれがある……など

▽二年男子
できる―60％　できない―40％
できない理由
・親に言っても仕方ない
・はずかしい
・しようとも思わない……など

▽二年女子
できる―76％　できない―24％
できない理由
・はずかしい
・姉妹にする
・しても、わかってくれない
・うるさい……など

▽三年男子
できる―53％　できない―47％
できない理由
・秘密にしておきたい
・理解してくれない
・自分のことは自分でする
・はずかしい……など

▽三年女子
できる―85％　できない―15％
できない理由
・考え方が違いすぎる
・干渉しすぎる
・はずかしい
・必要がない……など

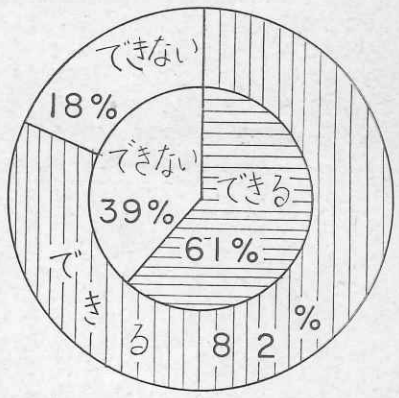
全体的にみると、71％が相談できると答え、29％が相談できないと答えている。できない理由として、全学年男女共に共通しているのは、「はずかしい」と「相談しても理解してくれない」の二つ。又、「自分と親の考え方に大きな違いがある」と言うのも多かったやはり、ここにも、最近よく言われている「親子の断絶」があるようだ。

最後の問、「現在、男女交際をしていますか？」に対しては、YESと答えた人が26％、NOと答えた人が74％だった。

▽YESの人
①男女交際の長所は？
・欠点を指摘し、補い合える
・毎日が楽しい
・何かとはげみになる
②男女交際の短所は？
・「みえ」をはりすぎることがある
・勉強がおろそかになる
③短所を改善しようとしましたか？
YES―56％　NO―44％
④相手をどんな時でも信頼できますか？
YES―67％　NO―33％
⑤悩みをうちあけていますか？
YES―70％　NO―30％

▽NOの人
①自分も交際したいと思いますか
YES―68％　NO―32％
②もし、交際したら悩みをうちあけられると思いますか？
YES―79％　NO―21％

もし男女交際をしたとすれば親に相談できますか？



内の円―男子，外の円―女子

愛

ディキンソン

一時間待つことは長い
もし　愛がすぐ向こうに
あるならば
永遠に待つことは短かい
もし　愛が終わりに
あるならば

クラスマッチ

六月十五日、曇り空の下で、三学年共通の混合バレーの試合を皮切りに、今年もクラスマッチが行なわれた。

今年は、バスケットがなくなり二年男子のサッカーと三年男子のソフトボールが新しく加わった。

試合は、近づく安保やビラまき事件などのごたごたをよそに、選手も応援の者も各クラスそれぞれよく団結して、雨続きのうっとうしさをふき飛ばすかのような活気あふれたものになった。

バレーの試合では、ハッスルした二年のあるクラスで、「イナズマ落とし」「逆回転サーブ」などと名付けられた（？）サーブが見られ、大変な人気を得ていた。また、サッカーでは、同点の時、コインで勝敗を決めたため、涙をのんで引き下がるクラスも続出した

今年は、クラスマッチの期間中雨の日が続いて、試合の日程が、相当きつかったようだ。サッカーの試合などは、小雨が降っていても行なわれた。そのような、悪コンディションの中で、選手達は泥んこになって頑張っていた。

又、今回のクラスマッチは、例年に比べると、応援が非常に活発だった。「〇年〇組、必勝！」や今、流行している言葉などを巧みに使った「応援旗」を作ったり、太鼓を鳴らしたり、クラスぐるみで、応援している情景が、よく見られた。

このように、今年のクラスマッチは、選手も応援する者も、「勝つこと」よりも、むしろ、「楽しむ」ことの方が、多かったようだ「クラスの親睦をはかる」という点においては、今回のクラスマッチは、大成功と言えるのではないだろうか。

〔サツカー〕

結果は次の通りである。

〔バレーボール〕
優勝　二―一
二位　一―八
三位　一―五・二―五

決勝戦は、たいへん見ごたえのある、白熱した一戦であった。

第一セットは、一年生が先取したものの、第二・第三セットは、経験がものをいった（？）のか、それとも一年生が油断してしまったのか、二年生が取り、結局、優勝は、二―一の手におさまった。

〔ソフトボール〕
優勝　二―五
二位　二―二
三位　二―一・二―六

前日までの雨で、水たまりがところどころにある、第二グランドでサッカーの決勝戦が行なわれた

両組の選手達は、泥んこになりながらも、互いに激しい闘志で、試合展開をしていたが、二―五が後半に入れた一点が決め手となり一対〇で二―五が優勝した。

〔ソフトボール〕
優勝　三―一
二位　三―四
三位　三―三・三―五

校門訪問

堺商業高校

去る六月六日（土）、我が新聞部員は、堺市立商業高校を訪問した。

南海高野線、浅香山駅を降りて十メートルぐらいのところに堺商高があった。

私達は、学校に着くとすぐ、一階にある新聞部の部室へ通され、校内を案内してもらった。

校舎は、鉄筋校舎と木造校舎があり、鉄筋校舎には、三学年全クラスの普通教室と文化クラブの部室などがあり、木造校舎は、実践教室・タイプ室などの特別教室ばかりだった。運動場は二つあり、第一グランドは、硬式野球部・男子ソフトボール部・女子ソフトボール部の三クラブが練習していた。第二グランドはサッカーなど2・3のクラブが使用していた。又、体育館では、体操部とバスケット部が活動していた。体育館には、りっぱな照明設備があり、たいへん明るかった。体育館の横に柔道場と卓球場があり、その隣に、運動部の部室があったが、せいぜい荷物を置いておける程度の狭いもので、建物自体も、少し古めかしいものだった。

この学校は、大正十年三月三十一日に「堺市立甲種高校」として発足し、最初は男子校だったそうだ。そして、戦後、「堺市立商業高校」として、男女共学になった。現在、生徒数は約千三百名で、学年あたり九クラスあり、男女の比率はだいたい一対三ぐらいだそうだ。

規則は、校内では、そんなにきびしくないそうだが、男子の制帽は、大切な行事の時や学校からどこへ行く時は、絶対に着帽しなければいけないそうだ

盛んなクラブは女子バレーで、その他、珍しいクラブといえば簿記部・商業調査部・ユネスコ部・応援部・バトミントン部・給品部などがあった。給品部は学用品などを、仕入れから販売まで、一切自分達の手でし、帳簿もきちんとつけ、授業で習ったことを、実際に実践しているとのことだった。

自治会は生徒会と呼ばれ、生徒は、あまり関心がなく、低調だそうだ。

この学校の修学旅行は、三年の春に行なわれ、東北・信州・南九州・北九州の四つのコースの中から、自分の好きなコースを選んで行くということだった

約二時間を過ごして、名残り惜しい思いで、我々はこの堺商業高校を後にした。

〈投書〉真の教育とは

阿倍高を思うに、もし先生方が本心から生徒のためを思った行動や態度で生徒に接するならば、阿倍高は、もっともっとよくなるだろう。

阿倍高というものに入学して感じた事と言えば、先生は生徒を信頼していないということである。すべての物事に、というわけではないが、別に我々生徒の力だけでもできると思うような点にまで先生が手をつけている。何か中学校から小学校へ進学したような錯覚にとらわれた事があったぐらいだ時には、生徒が一歩でも自分自身で歩くのを恐れるようにも見えた「高校教育」そこには、「高校」という名の付く限り義務教育ではない。そして又、それに付随するところの組織も、児童会とか生徒会とかいうものではない。それは自治会なのだ。生徒の自覚と自主を主体にした自治の会なのである

そして阿倍高生は皆、自治会会員なのである。それは会員がなぜ会員でもない者に、我々会員の自治というものを奪われなくてはいけないのか。それぞ、まぎしく自由の束縛である……。しかしながら自治会がどうのこうのという前に我々は学問を教えられる者であり又、先生は学問を教える立場にある者である。ということを忘れてはならないと思う。ゆえに我々は学問の教えを請うことなしでは、阿倍高、いや、すべての学校に行く必要はない。だから阿倍高に登校する限り、我々生徒は教えられるのを求め決してそれを拒否してはならないのである。しかし、結局理解し、判断するのは生徒であり、それを実のあるものにするのも生徒なのである。そこまで先生がタッチするのならば、それは真の教育ではないと思う。

ここまで言ってきて何を言いたいのか。決して数字がどうの国語がどうのこうのと言いたいのではない。要は、学校生活においてである。一口で表わせば先生と生徒の協力というものである。対立して何になるものでもない。それより真に阿倍高の将来を考え、先生生徒一体となって歩んで行ってほしいのである。しかも先に述べた教える立場と教えられる立場というものを踏まえた上でだ。

そこで先生に特に要望したい。自覚ある生徒は押え込まれると、それにつれ反感をいだく。そして又、先生が手を付ければ付ける程生徒は自分を見失う。たよるのだ責任感が弱くなる。反感を持つ者は、なおそれが強くなる。そんなせてましい結果ばかり見た態度を取るよりも生徒を真に教育させるという立場を取り、広い気持ちで生徒にまかして見よう、やらせてみようという態度がほしいものである。我々は、その時こそこの絶大な先生の信頼にこたえるべきなのだ。

二ノ一　古田浩一

編輯後記

今回の新聞は、記事の都合などで二面にしたのですが、自治会役員選挙が、延びたため、出稿の前になって、てんやわんやの大さわぎ。面数が減ったからと言って、決して楽なものではありませんでした。

又、今号は二面ですので、そこはそれ、量より質でカバーし、四面の時の内容以上にと思って、頑張ったのですが、あまり、そのあとが見られず、部員一同、深く反省しています。

尚、新聞部では、現在、部員募集中です。特に一年生の女子の人で、まだクラブに入ってない人、一度部室まで来て下さい。有望なあなたを、待っています。